

歴史にみる東区防災マップ

東区は海岸から遠く、急傾斜地がないといった特徴をもっています。しかし、自然災害による被害を全く心配しなくてよいなどということはありません。このマップでは、東区の土地の成り立ちや、明治以降大きな被害をもたらした濃尾地震(1891年)、東南海地震(1944年)、伊勢湾台風(1959年)を中心とした災害の記録などを紹介しています。

すべてが陸地ではなかった?

今でこそ海岸から離れた場所にある東区ですが、昔は海岸線が付近まで入り込んでいたという記録があります。これは縄文時代(紀元前131世紀頃～紀元前4世紀頃)に残されたとされる長久寺貝塚が発見されたことから読み取ることができます。



長久寺貝塚出土物
(博物館に保管)



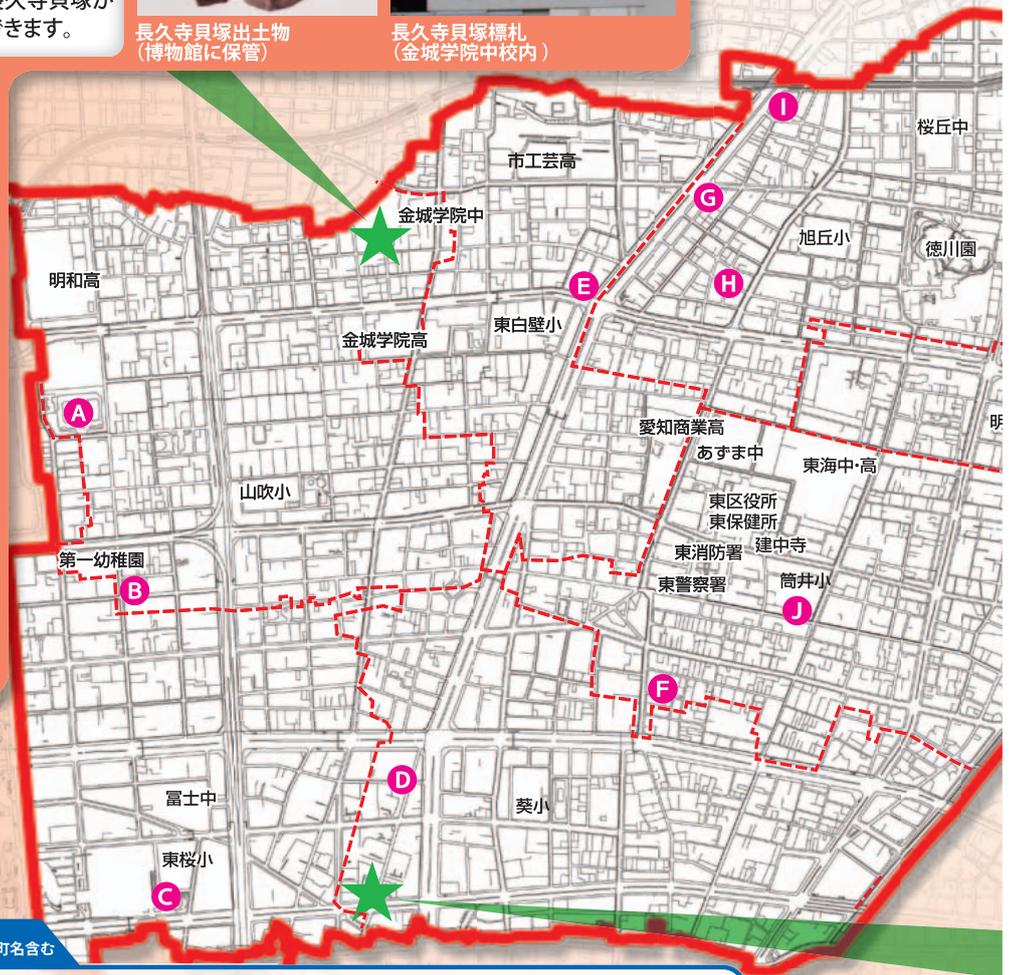
長久寺貝塚標札
(金城学院中学校内)

縄文・弥生時代の遺跡と海岸線



- 縄文時代の遺跡・貝塚
- 弥生時代の遺跡
- 推定海岸線(縄文時代)
- 現在の区界
- 丘陵地 (第三紀層、第四紀層洪積層(高位))
- 洪積平地(第四紀層洪積層(低位))
- 沖積平野

『名古屋市歴史まちづくり戦略』より



地形にまつわる東区の地名

- **A** 東外堀町(ひがしそとぼりちょう)・・・明治期成立。外堀の東側にあることから名付けられた。
- **B** 石町(こくちょう)・・・江戸時代、石切場であったことからという説がある。
- **C** 七曲町(ななまがりちょう)・・・江戸時代、家の建て方も大きさもまちまちで、町筋が曲がりくねっていたことから名付けられた。
- **D** 小川町(おがわちょう)・・・明治期成立。道筋に沿って建中寺の井戸から流れ出た水路が川を作っていたことによる。
- **E** 赤塚町(あかつからちょう)・・・江戸時代、付近に鉄砲稽古場の射的場として盛られた赤土の大きな塚があったことによる。
- **F** 水筒先町(すいとうさきまち)・・・江戸時代、建中寺の堀から湧き出る清水を南方へ渡すために地下に作られた樋の先であることから。
- **G** 坂上町(さかうえちょう)・・・江戸時代、城下の北東に大きな坂があり、その坂の上に位置することから名付けられた。
- **H** 山口町(やまぐちちょう)・・・明治期成立。昔の名古屋は那古野山と呼ばれる台地で、その山の入口にあたることに由来する。
- **I** 大曾根(おおそね)・・・河川の根底や砂地のことを曾根と呼ぶ説がある。
- **J** 筒井町(つついちょう)・・・明治期成立。建中寺の堀から湧いた清水が、門前広場の樋(筒)を使って流されていたことから。
- **K** 矢田(やだ)・・・低湿地をいう「谷田」に由来。
- **L** 前浪(まえなみ)・・・旧矢田川の河川であったことによるという説がある。
- **M** 砂田橋(すなだばし)・・・かつてこの地域を流れていた大幸川にかけられていた橋の名前から。

参考:「ひがし見聞録」(東区制100周年記念事業実行委員会発行)

三菱電機工場の埋め立て

三菱電機名古屋製作所の敷地は、もともと北西部が低地になっており、南東部との高低差は2.5mを超えていました。大正12年(1923年)以降、砂を使った埋め立て工事を行い、現在のような土地になったということです。



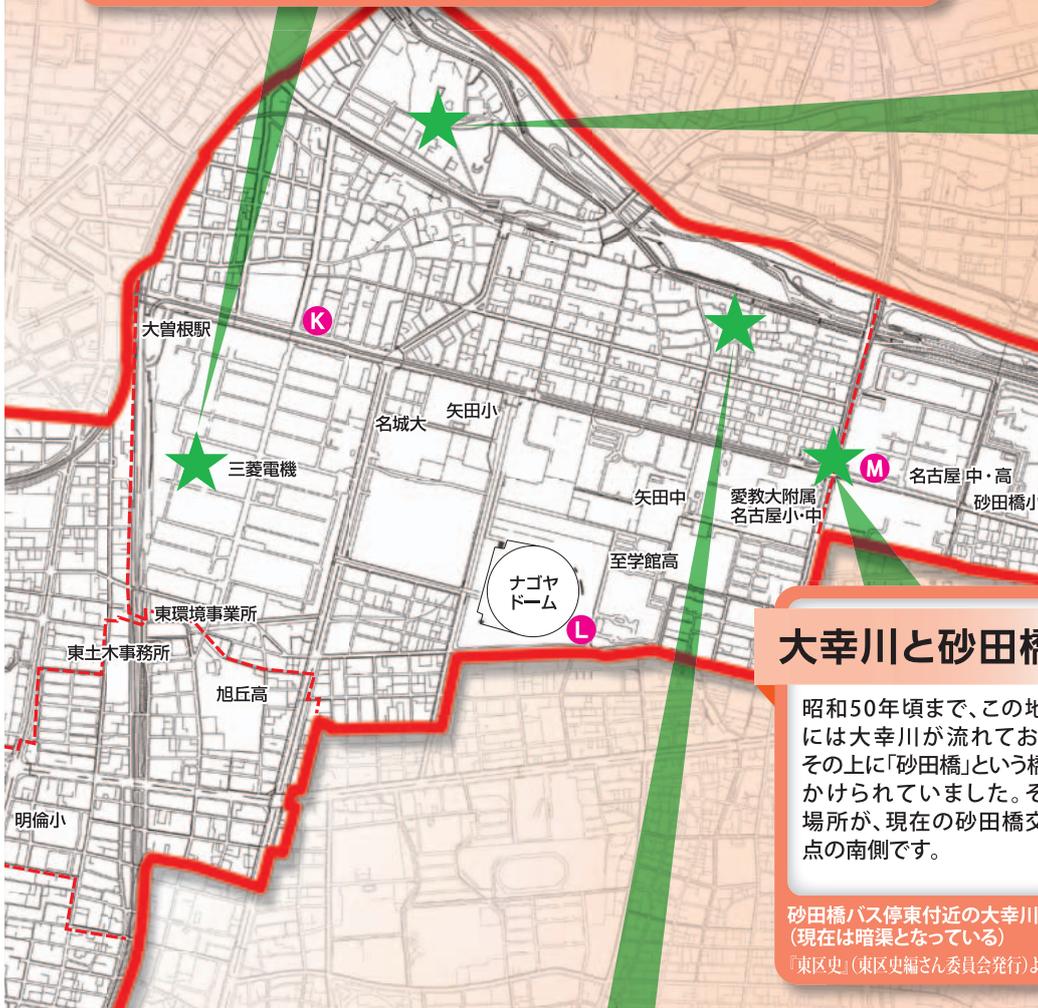
埋立の様子(大正12年1月26日撮影)
写真提供:三菱電機株式会社 名古屋製作所

洪水で流れの変わった矢田川

長母寺(矢田三丁目)のある場所は、かつて守山城址から続く台地の先端で、矢田川はこの南側を流れていました。しかし明和4年(1767年)に起こった「亥年の洪水」により、矢田川は陸地を突き破り、裏山を分断して長母寺の北側を流れるようになったのです。



明和3年頃までの矢田川の流路
『北区の歴史』(愛知県郷土資料刊行会発行)より転載



大幸川と砂田橋

昭和50年頃まで、この地域には大幸川が流れており、その上に「砂田橋」という橋がかけていました。その場所が、現在の砂田橋交差点の南側です。



砂田橋バス停東付近の大幸川
(現在は暗渠となっている)

『東区史』(東区史編さん委員会発行)より転載

碑文を読み解く

大幸八幡社(大幸四丁目)にある「震災記念碑」には、明治24年(1891年)の濃尾地震による被災の記録と復興への道のり、そして支援をされた天皇皇后両陛下や国への感謝の意が刻まれています。下に記しているのは、平成28年5月に名古屋中学校・高等学校「減災チーム」生徒(当時中学2年生)が現代語訳したものです。

ああ明治二十四年十月二十八日はなんたる凶日であつたらうか。
多くの雷が轟くような音を発して巨大なる地震が尾張・濃尾両国の平野に起こり、瞬時に地が裂け家が倒れたため、圧死・負傷した者は本村においても数十名の多さに至った。まさに言語を絶する惨状を極めていた。私たちの村では堤防や用水路はことごとく崩壊した。このままでは、ある日洪水に遭った時は家や田畑を失うことは必至である。ゆえに、到底この時に永住する目途ないので、皆で他の町村へ転居したいという考えに至った。
その時に恐れ多くも天皇皇后両陛下より莫大な救済金をいただき、一方復旧工事七千円(現在のお金で約一億円)を国からの支出から出していただくことになったので、村は工事を請け負うのに工事する人を千人以上使い、一年以上かけて復旧して元に戻すことができた。そして、村の人々は安堵して仕事につくことが出来た。
本当に天皇の御恩と他の様々な国の有志の方に義捐金を恵んでもらったことで復興ができた。村人一同感謝することこの上なく、ここにそれを表す。



明治二十六年十月二十八日
六郷村大字大幸 一同

供養碑

照遠寺(東桜二丁目)境内には、関東大震災(1923年・写真左)と濃尾地震(1891年・写真右)の供養碑があります。



※地図は名古屋都市計画基本図をもとに作成

ここでは、災害によって東区にもたらされた被害の様子や、実際に災
 験された方の体験談などを紹介しています。
 先人たちの残した災害の記録から防災への関心を深め、
 今後の災害に備えましょう。

濃尾地震と東区

「明治24年濃尾大震災寫真帖」(名古屋市防災会議発行、名古屋市)



名古屋市筒井町建中寺徳川墓所破壊の図



大曽根坂下家屋崩壊の図



名古屋市清水町震害

伊勢湾台風と東区



名古屋学院(現在の名古屋高等学校)

「伊勢湾台風基督教救援本部活動報告」(伊勢湾台風基督教救援本部発行、鶴舞中央図書館に所蔵)より転載



市立工芸高等学校

港防災センター伊勢湾台風ライブラリーより転載



臨時避難所となった筒井小学校で暮らす被災住民



建中寺本

写真

ゼロではない東区の被害

東南海地震(1944年)における死者ならびに住家の被害一覧

	栄区	千種区	東区	北区	西区	中村区	中区	昭和区	瑞穂区	熱田区	中川区	港区	南区	合計
死者	0	0	0	0	1	1	0	2	11	4	10	91	11	121
住家全壊	1	0	0	0	0	5	5	13	16	103	50	392	618	1,203
住家全壊	3	1	18	1	2	4	5	23	53	462	223	3,732	1,769	6,296

参考:「最新名古屋地盤図」(名古屋地盤図出版会発行、鶴舞中央図書館に所蔵)

伊勢湾台風(1959年)区別被害状況調査(昭和35年1月30日時点)

	千種区	東区	北区	西区	中村区	中区	昭和区	瑞穂区	熱田区	中川区	港区	南区	合計
被災者総数	6,407	3,601	10,167	26,919	45,325	3,397	8,480	43,156	64,176	110,634	94,046	115,009	531,317
人的被害													
重・軽傷者	281	262	275	415	708	1,919	874	2,442	4,882	4,903	10,349	13,173	40,528
住家被害													
全壊・半壊	860	406	401	419	576	433	398	601	2,393	2,389	16,134	24,405	49,415
浸水(床上・床下)	840	351	1,835	5,354	9,431	302	1,385	8,656	11,231	17,824	3,746	6,397	67,352
非住家被害	75	246	600	917	180	136	348	150	2,378	740	674	59	6,503
被災戸数	1,700	757	2,236	5,773	10,007	735	1,783	9,265	13,624	20,219	20,469	31,756	118,324

参考:「伊勢湾台風災害誌」(名古屋市発行、東図書館に所蔵)

※数字をみると、東区は他区に比べて被害が小さいものの、決してゼロではないことがわかります。

液状化にも注意! 鷗

江戸時代の武士であった朝日文左中記(おうむろうちゅうぎ)には、宝永11年(1734年)に発生した宝永地震によって、古田勝(北端付近)で地面が裂け泥水が噴出されています。

古田勝蔵逆の屋敷のうら地裂き或地形五六尺づゝ沈む。此外水

「名古屋叢書 続編 第11巻 鷗籠」(名古屋市教育委員会発行)より引用



朝日文左衛門家

「尾府名

<参考資料>

『名古屋市における既往の地震とその災害』(名古屋市防災会議)

『歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイド名古屋編』(愛知県防災局防災危機管理課)

『東海望楼 2014年4月号』(名古屋市消防局)『矢田川物語』(愛知県郷土資料刊行会) ※本文中で紹介しているものを除く

<協力>

●東区消防団連合会

●建中寺住職 村上 真瑞

●三菱電機株式会社 名古屋

※敬称略

災害を

災害を経験された方のお話



東南海地震(1944年)・三河地震(1945年)体験談

鬼頭正男さん(山吹学区)

昭和19年(1944年)、北区辻町の大隈鐵工所に勤務していたときのことで、戦時中で、日本にも空襲が来ていた頃だったので、職場で防空壕を作ることにしました。

12月7日、午後1時30分頃、防空壕に土を盛っていたとき、工場敷地内の池の水が大きく揺れたのです。マグニチュード8、死者・行方不明者1223人の東南海地震です。地面の揺れも激しく、あまりの激しさに立ってられないほどだったのを覚えています。地震で潰れた家はあまりなかったかと思えます。空襲に備えて窓ガラスにテープが貼ってあったので割れてもガラスが飛散することはありませんでした。また、火災が発生しても住民の協力によってすぐに消火され、火事が広がることもなかったかと思えます。地震発生から2、3日したところで、赤塚の神社(赤塚神明社)の鳥居や灯籠が倒れているのを見ました。

年が明け、昭和20年(1945年)1月13日、鐵工所の2階で同僚と2人、当直をしていると、夜中の3時頃にまた強烈な揺れが起きました。死者(愛知県下)2306人にのぼった三河地震です。どうしたらいいか戸惑い、飛び降りるように避難しました。

それ以来、この地域では大きな地震は起こっていませんが、いつ来るかわからないのが災害です。家の補強をしっかりとし、地域では特に高齢の方に気を遣って避難などを考えて欲しいものです。地震の最中は誰も助けてはくれないので、まず自分の命は自分で守ることが大切です。

林正男さん(東桜学区)

東南海地震当時、学徒勤労動員で港区にあった住友金属工業の名古屋軽合金製造所の工場で働いていました。昭和19年(1944年)12月7日の地震発生時は、昼食を終え工場へ戻る途中で、つむじ風が吹き、雲行きが変わったのを覚えています。工場のあった敷地には10mほどの道路が通っていて、その道路と工場の間には、防空壕が掘ってありました。地震によってその防空壕が1mほど盛り上がったと思ったら、今度は地べたより下がったのです。まるで土が波打つようで、経験したことも、聞いたこともない揺れでした。工場に戻ると、天井のクレーンが落ち、中は雑然としていました。

自宅のあった東区の東門前町(当時)から工場までは市電で通っていたのですが、架線があちこちで切れたため電車が動かず、徒歩で帰ったことを覚えています。幸い自宅の建物には壁にひびが一本入ったものの無事で、周囲の建物も倒れるような被害はなく、やはり東区的地盤は強いのだと思いました。

昭和20年(1945年)1月13日の三河地震も、東南海地震の余震とされ、戦時中でもあり、山間部の寺院に集団疎開していた子どもたちが倒壊の被害に遭ったことを覚えています。

地震はいつ起きるか分かりません。「安心、安全」のためには地盤の固い場所の堅牢な建物に住むのが一番ですが、最低限、洋服ダンスや戸棚など倒れる恐れのあるものは、固定するか、寝室に置かないようにしましょう。

伊勢湾台風(1959年)体験談

梶浦義一さん(東白壁学区)

伊勢湾台風が起こった当時は赤塚のあたりで化粧品店を営んでいました。強風で雨戸が飛ばされそうになり、商品の入った箱を戸のすぐ外側に積み、内側では従業員1人1枚戸を押さえてしのぎました。戸の下から水が入り込んでくるので、繰り返し雑巾で拭く必要がありました。翌日になると、近所の下駄屋さんの2階のタンスが向かいの家まで飛んでいたり、タンス屋さんのタンスが50mほど離れたところまで飛ばされていたりしたのを見ました。

伊勢湾台風を経験してから、扉に内側から支えの棒をかけ、飛ばされないよう対策をするようになりました。非常事態になったらどうするか、ということを実常時から考えることが大切です。非常食もですが、停電に備えて電池やマッチなどの準備も欠かせません。

佐久間清吉さん・堀敬壽さん(筒井学区)

当時は小学生で、内側から雨戸を押さえながら一晩中怖い思いをして過ごした記憶があります。翌日外に出ると、同級生の家が傾いていたり、近所の家の屋根が隣の家まで飛んでいたのを見ました。今の建中寺公園があるあたりでは、灯籠や10m以上ある松の木が全て倒れており、松の根っこが2m、3mと天に伸びていました。また電線が切れてしまったところでは、水たまりから火柱が立っていたりと、危ない箇所もありました。東区よりも被害の大きな他の地域から筒井小学校に避難している子どももいました。

これから将来に向けて、「自分のことは自分で守る」ための準備をしておかないといけないと思います。この地域では長い間大きな災害が起こっていませんが、気を緩めてはいけません。災害を経験した人たちの話を聞き、どれだけ恐ろしいものなのかを次の世代に伝えていくことも必要だと思えます。

(名古屋市資料館に所蔵)より転載



中町震害の図



建中寺本堂 大棟修復
写真提供:建中寺

注意! 鸚鵡籠中記より

た朝日文左衛門の綴った『鸚鵡籠中記』には、宝永4年(1707年)に発火、古田勝蔵家(現在の白壁三丁目)に泥水が噴出したという記録が残さ

ら地裂きて、泥水湧出づ。
此外水近き地は所々如此也

巻 鸚鵡籠中記
(行)より引用



左衛門家 ●

「尾府名古屋図」(蓬左文庫所蔵)

会 ●名古屋中学校・高等学校 減災チーム ●鶴舞中央図書館 ●蓬左文庫
上 真瑞 ●郷土史家(旭丘高校教頭)服部 俊之 ●東図書館 ●名古屋博物館 <問合せ先> 名古屋市長官舎総務課
社 名古屋製作所 ●名古屋大学名誉教授 溝口 常俊 ●名古屋市政資料館 ●東消防署 東区筒井一丁目7番74号 電話:052-934-1111

平成29年3月発行 ※この印刷物は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。